平成26年2月1日

図書館報

光丘

No.144

酒田のピロリ菌

酒田地区医師会十全堂 会長
本間清和

はじめに

２００年前の先祖を調べるため、山王森の光丘文庫にお邪魔したことがある。

正月明けの午後、森閑とした館内の一室で文化・文政年間の資料を逍遥した。

「よく来てくっだの」そんな声が聞こえるような心懐かしいひとときを過ごした。資料を揃えて頂いた光丘文庫の皆様に感謝である。

その光丘文庫から作文不得手なヤブ医者に原稿依頼があった。とても無理と思ったが、前段のようなギリがあって、ツラツケネグお断り出来なかった。

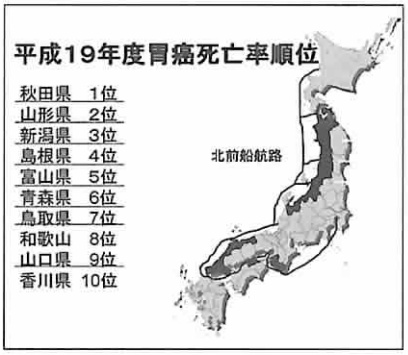
酒田の胃がん

図書館報には馴染まぬ話題で恐縮だが、酒田は胃がんが実に多い。

全国の胃がん死亡率を見ると1位は秋田県、2位が山形県だ。その上、庄内が内陸より明らかに多い。そして、庄内では酒田市が鶴岡市より高い。（国保レセプト集計より）『おくりびと』の酒田、県の順位に貢献しているなどと粋がっている場合ではない。

北前船航路と胃がん

〔図〕はデータが少し古いが、全国の胃がん死亡率の分布である。



日本海側の県が多い。和歌山県と香川県は日本海から外れるが、御用米を江戸に運んだ航路を重ねると、なにやら思わせぶりな絵図となる。北前船と胃がん、ドラマチックで面白いが、科学的根拠はない。

日本海と胃がん

世界各国の死亡率は、日本が1位、次いでロシア、韓国、中国と続く。日本海を囲む国々である。前述のとおり、日本では本州の日本海に面する地域、そして、山形県では海に接する庄内が内陸より高い。ロシアや中国でも沿海州に多いとしたら・・・非常に興味深い。

東アジアのピロリ菌

国は平成25年2月にピロリ菌の除菌療法を認可した。胃がんの原因を、ピロリ菌感染と認定したのである。ピロリ菌は遺伝子の解析で発癌性のある東アジア型と発癌性のない欧米型に区別される。

一方、ピロリ菌の遺伝子から人類の移動経路が推測できるようになった。それによると、数万年前、我々の先祖はピロリ菌とともにアフリカを出て、東アジア、ヨーロッパ、北米、南米などに拡散して行った。そして、数万年におよぶ移動の中で、それぞれの自然環境に応じた皮膚や様々な形質が出来上がったが、ピロリ菌の遺伝子もそれに応じて変異した。その結果、欧米地域で変異したピロリ菌は発癌性はなかったが、モンゴロイドが移動した東アジア地域のピロリ菌には発癌性が出現した。これが東アジア型ピロリ菌である。モンゴロイドが分布する東アジアの国々に胃がんが多いことが頷ける。

国内の胃がん分布の謎

胃がんの世界分布の謎はピロリ菌の型で理解できたが、日本や山形県の謎解きは難しい。日本人のピロリ菌はすべて東アジア型で、国内の感染率の地域差は殆どない。ピロリ菌感染の人が全て胃がんになるわけではないので、地域差のある何らかの要因が加わり、発病するのであろう。その要因が分からない。「北前船」は苦し紛れの箸休めの空想であった。

除菌療法

謎解きはともあれ、ピロリ菌は薬で除菌できる。除菌成功率は95％。菌が消滅すると胃がんの発生が抑えられる。（完全にゼロにはならない。要注意）

酒田市の取り組み

酒田市は、他市町村に先駆けて、従来の胃がん検診にピロリ菌検査を追加することを検討している。胃がんの多い酒田市の渾身の取り組みである。その効果を期待している。胃がん死亡率減少は地域医療の夢である。

終わりに

山王森の白崎医院を意識したわけではなかったが、図書館報には場違いの俄か造りの原稿を書いてしまった。梅咲く頃、光丘神社に詣でて、お詫びと些かの文才を無心して来ようかと思っている。

案外目にすることのない 白鳥の生態(二)

日本白鳥の会理事　角田　分(わかつ)

白鳥の感情表現

この写真が、私が四十数年にわたって白鳥の生態を追いかけるきっかけとなった写真です。一見、何の変哲もない普通の二羽のハクチョウの写真のようにも思えますが、私には、？？？だったのです。右のハクチョウが左のハクチョウの頭を咬んでいるのに咬まれた方は嫌がっているというより、むしろしっかりとくっついているのです。

大変不遜な話だが、その頃の私は、若いこともあり、ハクチョウに、いや鳥たちに感情があるとは思っていなかったのです。もしかしたら、ハクチョウには、感情があるのではないか。調べてみよう・・・が、今も続いているのです。

今なら、はっきりと断言できます。少なくともハクチョウたちには、人間と同じような、いやそれ以上とも言える感情がある。と。

感情を表す四字熟語に「喜怒哀楽」というのがありますが、喜びを表しているのが、次の写真だと思います。

春、三月暖かな陽射しに番(つがい)の二羽が、体の内面に湧き出てくる嬉しさに、並んで水面をこの写真のように走り出すのです。これは、やはり喜びと言えるでしょう。もちろん、怒りもある。人間が肩を怒らして相手を脅すような行動もハクチョウにもある。それが、次の四枚写真です。

写真でわかるように、ハクチョウはその怒りを首の角度で表すようだ。また、その怒りを水の中に吐き出して表現することもある。

怒り……そして、争いになる。この争い状況で、是非知っておいてほしいこともある。その様子がわかるのが次の写真です。

喧嘩をして、相手（写真中央に無抵抗に横になっている）をとことん追い詰めそれでも執拗に噛みつくハクチョウに対して、まわりのハクチョウが、争いを止めさせるように（？）高い声で「コォッ！コォッ！」と鳴きながら集まってきているのです。人間の社会であまり見ることがなくなった周囲の抑止力がハクチョウの世界にはまだはっきりと残っているのです。攻撃するハクチョウもまもなく攻撃を止めました。この周囲の抑止力も何らかの感情の表れではないかと私は思っていますが・・・。

感情で忘れられないのは、我が子に対する愛情ではないでしょうか。それもハクチョウにはしっかりとあるようです。これも百聞は一見に・・・でしょう。写真を見てください。親子の表情を。

白鳥にも感情が・・・で、生態を追いかけてきて、白鳥のいろいろな場面での感情表現を観察しながら、人としての感情の持ち方、あり方を教えられているのです。

同じ地球に生きている生きものとして、鳥・特に白鳥に対する自分の見方や考え方も日々改めさせられているのです。

現在の暮らしの中に生きるものとしての歴史
―「絵図面の世界～江戸期の庄内・酒田～」に際して思うこと―

東北公益文科大学教授　温井　亨

町絵図を、過去を示す史料としてだけでなく、現在を示す史料として読み解くということ、それをこれから説明してみたい。それには二つの面から考える必要がある。一つは歴史研究の在り方で、研究を研究として完結させる姿勢をとるか、それとも現在の問題にも係わりを持っていこうという姿勢をとるかで変わってくる。伝統的には歴史学は学問として現実の問題、現在の問題からは独立したものであるのが正統的な姿と言えよう。しかし、文化財に係わる美術史や建築史の分野では、保存という問題をめぐって、従来から現在の実際的な問題と係わりを持ってきた。また、平成十六年の文化財保護法改正によって生まれた文化的景観の制度では、保存の対象が、暮らしが営まれているある一定の地域を対象とすることによって、歴史の捉え方が大きく変わってきたように思われる。つまり、歴史を過去のものとして完結させるのではなく、現在の暮らしの中に生きているものとして見る捉え方が出てきたのである。

次に第二の面として挙げられるのは史料の問題である。歴史学における史料は長いあいだ文書であった。それは今でも変わらないだろうが、近年新たに絵画や地図、それに景観を史料として使う研究が現れてきている。景観を史料として使うとはどういうことかと言うと、現在我々が暮らしている都市や農村のなかに歴史的な痕跡を見つけ、それをもとに過去の歴史を推測していくという方法である。第一の面として挙げた、歴史学を現在に広げて考えて行くという姿勢とは、ちょうど反対の方向からのアプローチだが、現在と過去を繋げて考えるという点で共通しているし、そのとき町絵図は重要な役割を果たす。絵図に示されているのは空間だから、壊されない限り残るからである。

我が国において都市史研究が新しい局面に入り、今挙げた二つの面からのアプローチが進んだのは、一九八〇年代から活発になった建築学科、史学科双方出身の研究者による学際的な交流によるところが大きいが、その過程で影響を与えたものにイタリアにおける建築類型学がある。これは旧市街の、ある範囲内の全建築を実測し、連続平面図を作成して都市を研究する方法で、そこには街路や広場と一緒に、庭や建築内の間取り、廊下や部屋までが表される。この図は当然現在の都市図だが、実は歴史的な図でもある。なぜならイタリアでは改造されても、石造や煉瓦造であるため、基礎や壁体が完全に消え去ることはないからである。そしてさらに興味深いことに、ここには建設当初から現在に至るまでの、様々な時代の都市の姿が記されてもいるのである。それは最初に建設された街区が、壊されることなく拡大した都市の中に組み込まれ、そうして次々に前の時代に建設された街区を含みながら都市が発展したからである。様々な型の建築、都市構造を比較分析することにより、どれが古いのか、どの順番に都市が建設されていったのかが明らかになる。これが建築類型学による都市史研究である。イタリアではこうした研究をもとに、都市の保存再生が都市計画として行われた。

では、こうした研究、保存再生の都市計画を酒田でも実施できないだろうか。木造であること、戦後多くの町家を壊してしまったこと、そして大火と、酒田にイタリアの手法をそのまま適用することは難しい。また、学際的な研究も、江戸・東京や京都などの大都市の研究が中心で、酒田までは及んでいないのが現状である。しかし、それでも全く行われて来なかったわけではない。昭和六十二年、千葉大学の玉井研究室が酒田を訪れ、二十三軒の町家を屋根裏まで入って実測調査し、平面図、断面図、配置図、復原平面図を作成した。ただ残念ながら、この報告書はその後活かされることなく現在に至り、二十三軒のうち十三軒は取り壊されてしまった。

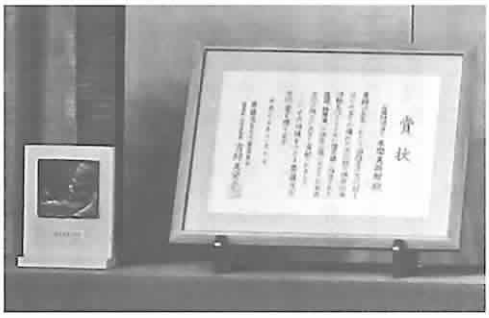
そうした中で、昨年の春、学生サークル「カフェの会」を立ち上げ、旧割烹小幡の土蔵を掃除して、夏のあいだ実験カフェを運営した。また市広報等で呼び掛け、「湊町さかた探検隊」という市民活動も始めた。町家の残存状況を調べ、内部を見学させてもらいながら、所有者と共に保存活用について考えようというのである。今回の絵図展を知ったのはそうした中でのことであり、早速見学にでかけたところ、光丘文庫ではお忙しいなか、古典籍調査員の杉原さんが解説してくださり見学することができた。

そこで最後に、見学しながら町家調査との関係について考えたことを説明して稿を閉じよう。調査報告書にはハンザキヤと呼ばれていた町家がある。これは通常の間口の半分で建てられた町家で、半分に割かれたという意味なのであろう。当然居住環境は悪いが、酒田が賑わった時期、土地が足りなくなってつくられたのだと推測される。調査では二か所が報告されているが、現在は一か所を残すのみである。ではそれはいつ頃のことか？ ところが、享保の町絵図に間口二間という町家が書かれているのである。だいぶ昔からあるらしい。では、どういう人たちが住んでいたのか？　現存するハンザキヤは河岸近くにある。酒田でも学際的な研究が行われれば、様々なことが分かってくるのではないかと思うのである。

本間美術館の齋藤茂吉文化賞受賞と美術館開館まで

公益財団法人本間美術館　館長　田　中　章　夫

昨年は、本間美術館が開館六十五周年を迎えたことと、同年に美術館の本間氏別邸庭園「鶴舞園」が、国の名勝に指定された記念の年となりました。本年は、本間氏別邸「清遠閣」と庭園「鶴舞園」が、文化十年（一八一三）の築造より二百年を迎えた年に当たり、前号では「清遠閣」と「鶴舞園」のことを紹介させて戴きました。



齋藤茂吉文化賞　賞状と盾

その後、既にご承知とは存じますが、本間美術館が第五十九回、平成二十五年度の齋藤茂吉文化賞（芸術部門）を受賞いたしました。十一月十日に文翔館で贈呈式が行われ、齋藤茂吉文化賞委員会委員長の吉村美栄子山形県知事より賞状と副賞の盾を授与されました。そこで、本号では齋藤茂吉文化賞受賞と美術館開館までについて記させて戴きます。

齋藤茂吉文化賞は、山形県の文化の向上・発展に資するため、芸術及び学術の分野において功績顕著な個人又は団体を顕彰することを目的として昭和三十年度に創設されました。

今回の本間美術館の齋藤茂吉文化賞受賞について、賞状には本間美術館が永年にわたり、国指定の文化財をはじめ多くの優れた文化財の保存伝承活動を行うとともに、国名勝に指定された庭園「鶴舞園」の保存公開に尽力され本県文化の向上に大きく貢献してきた功績によるとあります。

ほかにも、受賞に至る功績の概要には、前記のほかに、開館当時から、古美術から現代美術まで幅広い企画展示活動を行い、市民をはじめ、県内外の美術ファンに愛されていること。また、開館翌年より開催された山形県学童画展をはじめ、酒田市民美術展、酒田高校美術展の実施など、戦後の美術教育や市民の美術活動の発展に大きく貢献したこと。

昭和二十六年より平成五年まで、各流合同大茶会を継続。本間美術館「清遠閣」での茶会は、参加者が千人を超える時期もあった。現在は茶道具展の折に茶会を催し、地域の行事として定着していること。

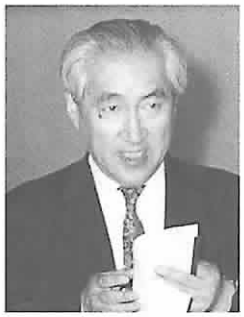
開館当初より六十年以上に渡り開催している雛人形展は、今日の山形県内の雛展示の先駆けとなったもので、庄内に伝えられた各種貴重な古典人形を展示し、全国に誇れるものであること。また、恒例の茶道具展には、庄内藩主酒井侯より本間家が拝領した名器が多数出品されることなども評価された結果です。

功績の中には、時代の変化と美術館の事情により、現在は美術館で開催していない、山形県学童画展、酒田市民美術展など、地域に密着し親しまれた展覧会などがありますが、開館当初より長年実施してきたことを認めて戴いたものと存じます。

もちろん、美術館活動は、当館が単独で行ったことではなく、市民と美術、芸術を愛好する多くの人々のご支援、ご協力を戴き出来たことです。歴史的にも、開館から市民組織の「酒田美術協会」が、本間美術館の財団法人移行まで館の運営に参画しており、市民とともに歩んできた美術館であることを示しています。

このたびの齋藤茂吉文化賞は、取りも直さず、これまで美術館を支えてくださいました人々とともに戴いた受賞です。心より感謝申し上げます。

最後に、美術館の六十六年の歩みには、多くの人々が館の運営・発展のために尽力を重ねてきましたが、特に本間順治、本間祐介兄弟の功績の一端をお伝えして閉じたいと思います。



本間順治氏

本間祐介氏

初代館長に就任した本間順治は文化財保存部美術工芸品課長、文化財専審委を務め、敗戦後に日本刀を護った恩人です。二代目館長の本間祐介は本間家の後見人となり、戦後の本間家を守り、後に日本博物館協会理事、本間物産㈱社長等数々の役職を歴任、文化、経済に活躍した功労者です。

戦前にこの二人が戦後の美術館創設に繋がる事業に係わっていたことが分かっています。本間家八代当主本間光弥が大正十二年（一九二三）に創設した財団法人光丘文庫より発展した「酒田市文化協会」が、昭和十七年（一九四二）に開催した「第一回古美術展覧会」の二人は企画者であり、他に藤井伊一、甲崎環、佐藤三郎が名を連ねており、戦後の美術館創設の母体になったと考えられること。そして、昭和十八年（一九四三）太平洋戦争の激化より、本間順治の紹介で上野国立美術研究所所蔵の文化財が本間家の土蔵に疎開してきたこと。酒田では本間祐介が中心になり、文化財を護ることに協力しました。このことも美術館創設の動機になっています。敗戦直後、昭和二十二年（一九四七）五月の本間美術館の開館には、本間家の地域貢献の方針を貫き通した二人が大きな役割を果たしました。

現在、齋藤茂吉文化賞受賞を契機に、私たちは先人の情熱と努力、人々の思いを受け継ぎ、これまで以上に地域の芸術文化活動へ貢献し親しまれる美術館を目指してまいります。

皆様には、今後とも一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「諸家文書目録Ⅲ」（その二）

酒田市立光丘文庫古典籍調査委員
田村真一

「横代・坪池家文書」

「横代・坪池家文書」は江戸時代、平田郷漆曽根組横代村で肝煎を勤めていた坪池家に伝わる文書です。坪池家は屋号を「仁助」と名乗っていました。

平安初期及び鎌倉期のものと思われる高阿弥田遺跡が横代村で発掘されていることから、古くから当地周辺に集落が形成されていたと考えられます。室町時代には豪族・横大氏が当地で力を成していました。

光丘文庫が所蔵する「横代・坪池家文書」は二百十三点に上ります。明治、大正期が八割を占め江戸期は二割ほどです。

江戸期の主な資料は「田地年季質入証文」「家屋敷譲渡証文」「金子借用証文」「横代村御水帳」などの質入・売買・金融・水帳（検地帳）などが挙げられます。

また、明治期においては、地租改正・耕地整理・習字手習・日々業・日々天気・私日記等々の資料です。

江戸期で着目すべきは「横代村水帳」享保五年（一七二〇）、「横代村水帳写」享和元年（一八〇一）等の水帳資料です。

江戸時代郷村の年貢は村の石高（村高『村から取れる米の総量』）にかけるものが主でした。

村の石高は検地に基づく田圃の面積と品等（上田・中田・下田などに分けた）によって決められました。

酒井忠勝は庄内への入部まもない元和九年（一六二三）に徳川幕府の命を受け検地を実施しました。この検地は元和の検地と呼ばれています。元和の検地は寛永元年（一六二四）「出羽庄内三郡村々高辻」としてまとめられました。

「横代村水帳」には左記の年代の横代村の検地状況が記されています。

寛文十年（一六七〇）、元禄八年（一六九五）、宝永元年（一七〇四）、享保九年（一七二四）、宝暦十二年（一七六二）。

同水帳は横代村の年貢収納状況を知る貴重な資料となっています。

明治期の着眼すべき資料としては大正五年（一九一六）五月七日に発行された『飽海郡耕地整理組合事業沿革及成績概要』が挙げられます。

耕地整理は明治政府によって明治三十二年（一八九九）に制定された耕地整理法に基づく土地改良事業のことです。

耕地整理は大略すると以下の二点を目指す政策でした。

① 水田水の利便性の効率化。

② 牛馬耕による作業の効率化。

やがて耕地整理は乾田馬耕と結びつき、農耕は飛躍的な進歩を遂げます。

飽海郡で耕地整理に力を注いだ人は酒田・本間家の係累・本間光勇でした。

本間光勇は明治四十三年（一九一〇）飽海郡耕地整理組合を組織し二十年余にわたって耕地七千余町歩を整理しました。

「坪池家文書」に収録されている『飽海郡耕地整理組合事業沿革及成績概要』に、次のような事柄が記されています。

「整理地区土地ノ状況」「事業沿革概要」「整理施行年度別面積帳」「地主小作人間利益ノ分配」等々。

同資料には、明治三十二年（一八九九）から大正初期までの飽海地区の耕地整理事業が具に記されています。

「横代・坪池家文書」は近世の検地、及江戸幕府末期から明治にかけて、日本が大きく変わる時代、地方から見た日本の変動期の貴重な資料と言えます。

「土崎・小松家文書」

「土崎・小松家文書」は江戸時代、平田郷漆曽根組土崎村で肝煎を勤めていた小松勘助家に伝わる文書です。

土崎は最上氏支配の慶長年間（一五九六～一六一四）に新田開発が行われました。

小松勘助家は荒瀬郷草津の小松家から分かれて土崎に移り住んだといわれています。その時期についてはわかっていません。

小松勘助家は土崎黎明期より肝煎として土崎新田開発に携わっていました。小松家は質地（年貢米を貸借するために担保として手に入れた土地）地主として宝暦期（一七五一年～一七六三年）には多くの土地を集積し、村方大地主、豪農としての地位を確立していきました。

光丘文庫が所蔵する「土崎・小松家文書」は四百四十五点に上ります。

同文書群は資料の性質によっておおまかに左記の四つに分類できます。

① 「当分帳」

② 「大福帳」

③ 「稼覚帳」

④ 「稲数仕米覚帳」

① 「当分帳」は土崎村の村用金控帳です。年代は天明四年（一七八四）から明治三十三年（一九〇〇）その内容は御用金の支払い、村高の覚え、自然災害による救済の願いなどです。

② 「大福帳」は質地地主である小松家の米金貸借の覚書きです。年代は安永九年（一七八〇）から慶応元年（一八六五）。

③ 「稼覚帳」は農事作業記録です。年代は文化四年（一八〇七）から明治九年（一八七六）。

④ 「稲数仕米覚帳」は小作農民からの作徳米（小作人が地主へ納める米）の納入記録です。年代は明和四年（一七六七）から明治二十八年（一八九五）。

「土崎・小松家文書」は郷村村役人の業務や江戸期の農作業を知る貴重な史料と言えます。

読書感想文

勉強って楽しい!!

平田小学校
三年 富樫 優

食いしんぼうで、算数が苦手なジャコ。何だか私みたいで親しみがわく。色々なことを覚えさせられて、勉強なんて何かの役に立つのかなって思っているところは、本当に同感だ。なぜ勉強しなくてはいけないのだろう。宿題に集中できないところまでそっくりだ。

ジャコは、ある日、図書館でお菓子の作り方のページを見つけて書き写した。読み書きの勉強が大きらいなジャコだけれど、生まれてはじめて、たった一人で最後まで読んだ。「これは使えるぞ!このクッキーを自分で作って食べてみたい。」と思ったから。

クッキーを作りはじめると、「室温」というむずかしい言葉が出てきたり、「グラム」などの単位が出てきたり、クッキー作りはてんてこまい。でも、おじいちゃんや近所のおばさんの力をかりて、初めてやいたクッキーは最高!大好きなお菓子作りのためには、言葉や算数の勉強が大切なことに気づいていく。でも大好きなことのためだからつらくない。

私は、お話を考えることが大好き。保育園のころから、手作りの小さい絵本を何冊も書いている。お母さんからは、

「優はいつも想像の世界に住んでいるね。」

なんて言われるけれど楽しくてしょうがない。時間も忘れて書いている。いつか、子どもが読む本を書く作家やマンガ家になりたい。そのことをお父さんに話したら、

「作家になるなら、言葉だけでなく、歴史だとか地理だとか、色々な事を知っていると おもしろいものが書けるんだよ。」

と教えてくれた。「なるほど!」と思った。

ジャコは大好きなお菓子を作るために時計も読めるようになったし、苦手だった九九もすらすらできるようになった。夢をかなえたり、自分の好きなことができるようになったりするためには、勉強が大切なのだと思った。そう考えたら、たくさん本を読んで、色々なことが知りたくなった。本を読むためには、漢字が読めないといけない。作家になるからには文章を書く力だって必要だ。人を知るためには歴史も知りたい。地理や理科で世界の国の事や自然の事などもわかったら楽しそう。考えただけでも世界がぐんぐん広がっていくようだ。でも、本なんて書けるのかしら。

「いつも成功するとは限らない。失敗した方が上手になることもある。」

という、ジャコのおじいちゃんの言葉が心に残った。自分に自信を持って、失敗と反省をくり返しながら、こつこつ練習を続けることが大切だと、ジャコが教えてくれた。ねばり強く続けて、あきらめないということも。

何かひとつでいいから自分のしたいことを見つけたら、そのためにがんばるとたくさんの力がついてくる。直接関係がないようでも今学んでいることが役に立つことがある。勉強はむだじゃない。自分の夢とつながっているんだ。私も好きなことをあきらめたくない。今は何でも吸収して覚えていく時だ。何だかやる気がむくむくとわいてきた。

《『ジャコのお菓子な学校』ラッシェル・オスファテール著、ダニエル遠藤みのり訳、風川恭子イラスト、文研出版》

第五十九回青少年読書感想文コンクール山形県審査会 小学校中学年課題図書の部 最優秀

掲載の最優秀作品のほか、同コンクールでは酒田・飽海地区小学生から次の作品が「最優秀」、「優秀」「優良」に選ばれました。

〈小学校中学年課題図書の部〉

○最優秀

「ゾウと人間のつながり」
(『ゾウの森とポテトチップス』)
泉小 四年 鈴木 健士朗

〈小学校低学年自由図書の部〉

○優 秀

「わすれないよ、じじ」
(『おじいちゃんがおばけになったわけ』)
松原小 二年 阿部 未麗

〈小学校低学年課題図書の部〉

○優 良

「あのこの一ばん、ぼくの一ばん」
(『わたしのいちばんあのこの1ばん』)
遊佐小 一年 遠藤 雅弥

執筆者紹介

本間 清和
(ほんま内科胃腸科医院院長、酒田地区医師会十全堂会長)

角田 分
(日本白鳥の会理事)

温井 亨
(東北公益文科大学教授)

田中 章夫
(公益財団法人本間美術館館長)

田村 真一
(酒田市立光丘文庫古典籍調査員)

富樫 優
(酒田市立平田小学校三年)

酒田市立図書館ホームページ
http://library.city.sakata.lg.jp/

デザイン 佐藤十弥

発行 酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫
酒田市中央西町二番五九号 電話(24)二九九六番
酒田市日吉町二丁目七番七一号 電話(22)〇五五一番
印刷 明徴出版㈲